

福澤素子(ふくざわもとこ)先生のプロフィール

1979年慶応義塾大学医学部卒業。同大学保健管理センター助手、専任講師などを経て2002年より同大学医学部ツムラ東洋医学寄附講座助教授。

日本東洋医学会では参事、評議員、学術教育委員会副委員長、専門医制度委員を務めた。
西洋医学での専門は内分泌代謝内科。
現在、表参道福澤クリニック副院長。

◆先生が初めて漢方と出会われたのはいつ頃ですか

祖父と父が漢方治療に携わっていたので、自分も幼い頃から煎じ薬を飲んで、その効果を実感して育ちました。



ですから、医学部在学中から自分で漢方の勉強をして、卒業後は西洋医学と漢方の各々の長所を生かし、症状や疾患によって自然に漢方を使うようになりました。

◆先生の御専門で漢方はどのような効果を発揮していますか

西洋医学では内分泌代謝内科が専門ですが、糖尿病の合併症や高脂血症、パセドウ病や慢性甲状腺炎の諸症状、肥満に伴う膝関節症などに対して漢方を用いて有用性が認められます。

◆普段の治療で漢方薬と西洋薬との割合はどれくらいですか

漢方専門外来では、98%くらいは漢方薬を処方しますが、著明な高血圧や中等度以上の糖尿病などに西洋薬を併用しています。

西洋医学の外来では西洋薬が主体となり、90%は西洋薬になりますが、症状や患者さんの希望によって漢方薬を処方します。



◆10年後の漢方医療はどうなっている(またはどうあってほしい)とお考えですか

今年度から医学教育のコア・カリキュラムに「和漢薬について概説できる」という項目が盛り込まれ、また、今年度内に日本東洋医学会から漢方医学の教科書(入門編)も発刊予定です。

今後漢方の教育システムは徐々に整っていくものと思われます。
その結果、現代医療の中で、さらに漢方治療が積極的に取り入れられるようになると思います。

◆先生ご自身漢方を飲んで効果を実感なさったことがありますか

幼い頃から感冒に桂枝湯や柴胡桂枝湯を服用していました。

また医学部の学生時代、スキー部の夏合宿で立山に行っていた時に腹痛がおきて、市内の外科病院で虫垂炎と診断されましたが、帰京する道々、手持ちの桂枝加芍薬湯と大黄甘草湯を服用していたら、東京につく頃には腹痛もすっかり治ってしまい手術を受けずに済みました。

そのほか冷えたり、肩こりから頭痛が起きることがありますが、早めに呉茱萸湯を飲むと軽快します。



◆これから漢方医を志す方に一言お願いします

良い師につき、書物での勉強とベッドサイドで四診や処方の方針加減の実際を学んでいくとよいと思います。

◆漢方に関心のある一般の方に一言お願いします

漢方と西洋医学のどちらにもそれぞれ長所がありますので、症状や疾患によってそれぞれを上手に使って、より健康になっていただきたいと思います。

◆座右の銘、好きな言葉などありましたら教えてください

朱熹の詩にある

「少年老い易く学成り難し」です。



注意：先生へのインタビューは、当会が2002年9月に行った内容です。